

2025年3月17日から21日までの5日間、私はEAA主催の北京研修に参加した。1日目と5日目は移動がメインで、2・3・4日目には北京大学、頤和園、万里の長城、清華大学を訪問した。北京・清華両大学では、在学生たちと交流する機会も得た。

私は自分の専門が日本文化であることに関連し、「日本」とは一体何か、と問うことを目的にEAAの活動に参加している。この問いについて、5日間の旅の中で考えたことを、この場を借りて報告したい。

「日本」とは何か。「中国」とは何か。その境界は、あるところでは極めて曖昧である。北京大学構内で、私はたくさんの伝統的な「中国風」建築を見た。具体的には、寄棟造りの瓦屋根（格式の高い造り方らしい）、極彩色の装飾、格子窓などを持つ建築である。一般に、伝統文化にはその国・地域・民族のアイデンティティが現れやすい。しかし、これらの「中国風」要素は日本文化にも存在する。中国文化が日本文化に与えてきた影響を考えればそれは当然のことですらあり、東アジアという大きな文化圏の中で、中国文化と日本文化がグラデーションをなしていることを実感させる。



北京大学内の建物

しかし、「中国」と「日本」は地続きだ、と単純に結論づけることもできない。その間には確かに厳然たる境界、理解不能なポイントが存在する。頤和園や万里の長城はいずれも巨大な人工建造物である。元来の地形や景観を変えてしまうほどに壮大なこの発想は、日本ではなかなか見られないものであり、自分の理解の範疇を優に超えて驚嘆を感じさせる。日本では、その土地の気候・地形・風景をそのままに愛でることが多い（そしてそれを称揚する言説も多い）。しかしそのような態度は、四季の変化に富む適度な気候と、外敵の脅威の比較的少ない島国という恵まれた環境において初めて可能だったことを改めて意識させられた。



万里の長城（八達嶺長城）

以上のような地続きの感覚と境界の感覚は、現地の学生との交流の場面でも常に強く感じられた。清

華大学の学生と交流したとき、フェミニズムやジェンダーに関する言論のあり方が話題に上がった。こうした話題はネット上では規制の対象となるが、大学内では比較的オープンな議論が行われているようだ。私たちは英語と中国語を介してこの問題に関する意見を共有し、共通認識を得ることができた。しかし同時に、センシティブな話題に対する抑圧が日常に存在するという清華大学の学生の感覚を、私は知識として知ってはいても、完全には共有できないということも強く感じた。さらに、言語的な未熟さから削ぎ落とされてしまったものも多くあった。私は中国語が持つ世界観や微妙なニュアンスを感じ取れず、逆に日本語でなら表現できるニュアンスを英語や中国語では表現できなかった。その結果、議論は一般の範疇を出ないままに終わってしまったように思う。その他の場面でも、同じ大学生として他愛のない会話をしている時でさえ、相手が大学生活の中で感じるプレッシャーや、潜り抜けてきたであろう高考の苦勞がその背景にあることを私は理解していながら、実感として知ることは決してできない。自分の言葉で相手に自分を伝えることができる喜び・相手の言葉で相手を理解できる喜びを感じるとともに、そのプロセスでたくさんの大切なものが削ぎ落とされていくことへのもどかしさや悔しさを同時に感じていた。

自分や日本と地続きでありながら、そのすべてを知ることは決してできない他者。それが、5日間の研修を通して私が見た「中国」だった。それは翻って、中国の影響を強く受けながら、それと全く同質ではない「日本」も照らし出した。「中国」のアイデンティティと「日本」のアイデンティティは多くの共通項を持ちながら、相容れない部分もある。相容れないその部分は互いにとって最も重要なはずだが、それを把握することは容易ではなく、不可能ですらあるかもしれない。このような視座を得た上で、なおも「日本」とは何か、「中国」とは何かという問いを発し続けることには、果たしてどのような意義があるだろうか。

この問いに対する一つの回答を、私は自分が感じたもどかしさの中に求めたい。それは、相手の中に自分には知り得ないものがあると理解しながら、なおもそれを知りたいと願う欲求であったように思う。そして、そこに自分の言葉で、自分の足で、歩み寄っていききたいという欲求でもあったように思う。この欲求はきっと中国の学生たちも持っていたに違いないと感じるのは、同じ人間としての普遍性を求めてしまう私の願望にすぎないだろうか。そうだとすると、私は私の中にこの欲求を感じる限り、そこに忠実でありたい。完全に知り尽くすことができないからこそ、私は問いを発することができ、たどりつかないからこそ、どこまでも自分で試行錯誤しながら歩み寄ることができる。今回の北京旅行で私が多くの発見を得たように、その試行錯誤の過程にも重要な発見があると信じる。